

□ 静岡県立浜松視覚特別支援学校 校長 秋本啓子

日 時 平成29年10月17日(火) 13時30分～15時00分
 会 場 静岡県立浜松視覚特別支援学校
 参加者 82名 一 児童生徒・教職員

演 題 卒業生によるピアノとオカリナ演奏

講師：えんじろう (卒業生 オカリナ奏者)

講演内容

講演は、えんじろう氏のオカリナ、ピアノ弾きりょうこのピアノの二人のユニット（ユニット名は音心）として行われた。

えんじろう氏は本校卒業生でオカリナ奏者として幅広く活躍されている。オカリナは土でできている楽器である。えんじろう氏は高い音の出るものから低音のものまで何種類ものオカリナを使い分けて、ピアノ伴奏に合わせて演奏された。はじめてオカリナの音色を生で聴いた生徒も多く、きれいな音色にうっとりとした表情を見せていた。最初の曲は「となりのトトロ」の挿入曲だった。トトロの雰囲気ぴったりの音色で映画の世界に引き込まれるようであった。次はサンサーンスの白鳥をしっとり聴かせてくれた。秋の曲メドレーは、「もみじ」、「小さい秋見つけた」などおなじみの曲で、口ずさむ生徒もいた。また、虫や鳥の鳴き声を随所で入れてくださり、オカリナという楽器の多彩さに驚かされた。

オリジナル曲はたくさん演奏されたが、「つぼみ」という曲では歌を歌われた。以前えんじろう氏の演奏を聴いたことがあった生徒は、えんじろう氏の振り付けに合わせて声を上げて歌っていた。また、「米の3000十」ではおかまを鳴らすパフォーマンスがあり、ユニークな音が鳴り響いた。オリジナル曲では物を擬人化して、物の気持ちを詩にして、感謝の気持ちを表すなど、えんじろう氏の人柄を感じさせられた。

最後は「たたんたんのたん ローカル線が行く」という曲だった。さびのフレーズである「たたんたんのたん」はえんじろう氏のオカリナに合わせて一部合唱し、会場が一体になった。大きな拍手の後のアンコールは本校の校歌をアレンジした曲を披露して下さった。卒業生ならではの心あたたまる演出にみなぎりが盛上がった。

オカリナの音色はあたたかでもろやか、聴く者の心をやさしく包み、静かな感動を与えてくれた。

そんなオカリナの名演奏とともにえんじろう氏のトークも私達を魅了した。トークの中で、えんじろう氏は、普通科や専攻科時代の思いや不安、自立の決意やオカリナに夢を見つけたことなどを率直に話して下さった。

小さい頃が両親はマッサージ師で自分もマッサージ師になると当たり前のように思っていたそうである。小学部から盲学校に入学され専攻科では鍼、灸、マッサージになるための勉強をされた。その後、マッサージ師の仕事に就かれたが、仕事に集中できず、何もやろうと

しない時期が2年間続いた。そのときに作った曲が「不安のトンネル」。今でもその曲を聴くと、そのときの気持ちを思い出すそうである。

そんなある日。これではいけないと思い立ち、住居をはじめ家を出る準備をすべて整えてから家族に話をし、浜松で一人暮らしをはじめた。半年間風呂屋で働き、その後整形外科に就職したが、マッサージで「ありがとう。」のこぼをいただくたびに自分は本当に役に立っているのか疑問に感じていた。一方、オカリナの演奏では、演奏後にいただいた「ありがとう。」のこぼに喜んでくれたと実感があった。それで、本格的にオカリナの道に進むことを決心されたということだった。トークの中で言われた「いろいろな体験から実感したことは、夢を見ていないときは頑張れない、あこがれの演奏家を目指すようになってから目標が前に見えるようになった。小さい夢でもいい、ないよりずっといい。」ということばは印象的であった。

将来のことに不安をかかえる後輩たちにはすばらしいエールだった。児童生徒は、休憩時間も演奏後もえんじろう氏の回りに集まり、オカリナを触らせてもらったり、話したりしていた。児童生徒にも職員にも心に残るすばらしい演奏会、講演会だった。

成果及び特記事項

本講演会は卒業生によるオカリナとピアノの演奏ということで幼児児童生徒、教職員、保護者が参加した。本校は視覚に障害のある幼小小学部、中学部、高等部普通科、専攻科があり、専攻科には高校卒業してすぐに入学したものから40代のもので在籍しているのが大きな特徴である。特に専攻科にはこの学校にいたるまでに一人一人様々な経験をしており、いろいろな思いを感じながら日々将来に向かって進んでいる。

講演では幼小小学部の児童は体を動かしながら演奏を聴いた。中学部の生徒は「音色がきれいだった」という感想を述べた。高等部普通科の生徒は熱心に聴き、知っている歌と一緒に歌った。専攻科の生徒はオカリナの種類に関心し、話や演奏に聞き入った。どの年齢層の幼児児童生徒でも、全員が堪能できる内容であった。

今回のオカリナの音色、卒業生のえんじろう氏の経験にもとづいた話は心を安らぐひとときを与え、夢を描き、生きる力につながる一助になったのではないかと思う。

